中大の皆さん、よろしく

多摩動物公園の「パオ」です

中大の隣組・多摩動物公園で生まれたオスのゾウ「パオ」が話題を集めている。私たち学生記者は多摩動物公園のご厚意で、パオ誕生までの一部始終を収めたビデオと、やんちゃなパオを見せてもらった。愛嬌たっぷりに走り回るパオは当分、多摩動物公園の〝目玉〟となりそうだ。

（学生記者・木瀬　恵子）

間もなく1歳のアフリカ象

昨年4月25日、多摩動物公園で初めて、アフリカ象の赤ちゃんが産まれた。名前は一般公募で「パオ」と付けられた。どうやら、その鳴き声から連想された名前らしい。

「パオ」が産まれるまでの出産ビデオは、まず、両親のお見合いから始まる。その後、交尾を経て採血により妊娠判定。ここまではスムーズにいったようだが、日本国内での象の妊娠例が少なく、妊娠しても死産するなど、無事に出産する確率は低いため油断できない。

便の形が小さく、回数が多い――出産が近い合図だ。出産5日前から職員が泊まり込みで見守った。4月25日午後10時、破水が始まった。その20分後、「パオ」が後ろ足から出てきた。いわゆる逆子（さかご）だが、体重は１００キロ。妊娠期間は実に22カ月だった。

出産後、30分で自力で「立った」

出産後、半膜を取り除くために蹴ったり、産声を上げさせようと子象に足を乗せたりする。母親象の一連の行動に、学生記者スタッフからも歓声が上がる。出産後30分、パオは自力で立ち上がる。そして初乳を飲む。飲まないと免疫ができないら

しい。ここまでくればひと安心。この時は「うれしいというより、ホッとした気持ちだった」と職員さんが当時の様子を語ってくれたが、この言葉に実感がこもっていた。

ビデオを見たあと、いよいよ本物の「パオ」と初対面。象は1日で約1キロ増えるというから、間もなく誕生日を迎える現在は優に400キロを超えている。「パオ！」と飼育係の方が呼ぶと、自分の名前がわかっているのか、「パオ」がピョンピョン跳ねながら姿を現した。

「かわいい」という声が一斉に上がる。しかし、象も人間の子供と同じで、なかなかいうことを聞かない。食べ物の好き嫌いもあり、大好物はリンゴ、バナナなど甘く、汁気のある物。嫌いなものはニンジン。事実、食事を与えてもニンジンだけはきれいに除く。まるで、誰かさんの小さい時によく似ているところが面白かった。

甘い果物大好き、ニンジンは大嫌い！

21世紀に向けた動物園構想を語る中山園長

「パオ」に触らせてもらった。皮膚は固く、ザラザラとしていたが、大きな耳の裏が温かい。ここで暑い時の体温調節を測っていると説明された。14歳で「パオ」を妊娠した母親象は、いま16歳。

象の成長曲線は人間に似て、20歳ぐらいまでは成長を続ける。動物園の考えでは「2年ほど親子で生活させたら母親象を離し、パオに兄弟を作ってあげたい」ということらしい。

「パオ」がお兄ちゃんらしくなるためのしつけも、間もなく始まる。「無邪気でわがまま放題のパオが見られるのも今のうち」と思った。

動物園を教育の場としたい

動物を保護したい人が自ら活動をしている欧米とは対照的に、日本は税金で動物園が運営され、動物たちと接する施設・環境は十分整っているのに、実際に足を運ぶ人は少ない。

「日本では教育の場で動物園が使われていないようだ。学校と動物園の接点を考える必要がある」と力説する中山恆輔園長の話が印象的だった。また、「21世紀に向けた動物園として、檻（おり）を辞めて堀にする。現在の建物中心から動物中心に、また人工的なものをできるだけ取り除きたい」などの構想も話してくださった。

特に中大生、わざわざ多摩まで通っていながら、家を往復するだけではもったいない。時にはゆっくり動物と接してみるのもいいものだ。

（あまり可愛いので、裏表紙も「パオ君」の写真を特集しました）

【開園時間】午前9時半～午後5時（入園は午後4時まで）【入園料】500円（みどりの日＝4月29日、開園記念日＝5月5日、都民の日＝10月1日は無料）【休園日】毎週月曜日（月曜日が祝日、都民の日にあたる場合は、その翌日が休園）。年末年始の休園日は12月29日～1月3日まで。【問い合わせ】☎042－591－1611